

姫路城下と城下町

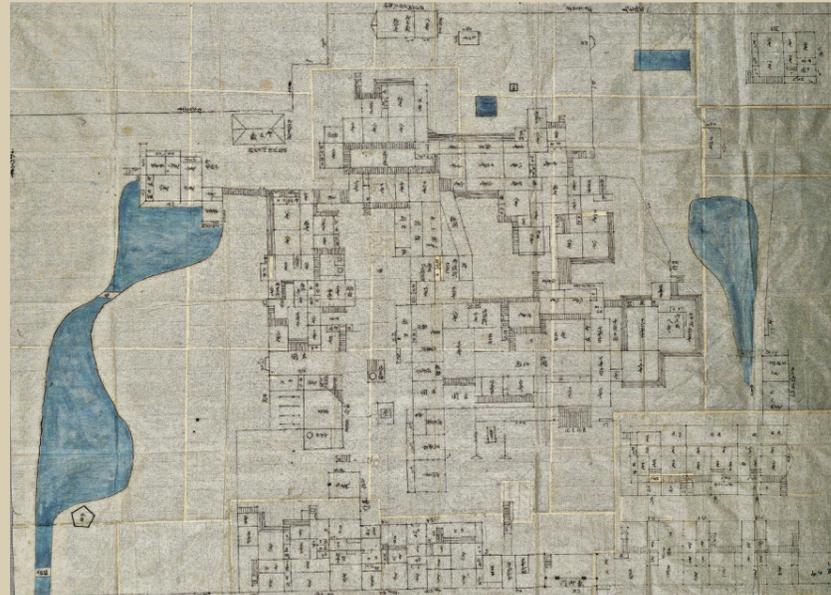
姫路は古代には播磨国府があり、中世には播磨守護の屋敷などが置かれた。近世の姫路城下は、その枠組みを一部残しつつ、播磨国に封じられた池田輝政が、姫路城と共に新たに形成したものである。輝政は、城の中心部とした姫山と鷲山の山麓を内堀で囲み、その外側に中堀で囲まれた家臣の上・中級の侍屋敷地を設けた。侍屋敷地には「大名町」「桜町」等の町名があるが、これは通称で行政単位の町名ではない。だから、城下町ではなく、城下である。さらに、中堀と惣構となる外堀の間には町人地が設定された。これがいわば城下町である。城下町には西国街道や但馬道、飾磨街道が引き込まれて、道沿いの町々は商業や運輸業などで繁盛した。

⑦ 高須隼人屋敷跡

高須家は、酒井家の筆頭家老を世襲した家柄で、隼人は当主が名乗る通称である。「高須系譜」等では、天正18年(1590)、酒井重忠・忠世が家老職を条件に酒井家に迎えたといわれ、前橋時代には大胡城を預かり、高須家士は前橋ではなく大胡城下に集住させるなど、特別扱いされる家であった。

現在、高須家の屋敷地の一部は家老屋敷公園となっている。松平時代の絵図(図9)では、南向きの長大な長屋門が屋敷の正門となり、敷地の東側に樹木が見られる。高須屋敷図(図10)でも長屋門は南向きで、その内部には多数の部屋があり、奉公人などの居住空間となっていたらしい。また、敷地の東と西にはそれぞれ池のある庭があったことを確認できる。この庭にあった「香雪園」の石碑が、野里の雲松寺境内に移設されて現存している。

(左:図9 右:図10)



⑧ 好古堂跡

好古堂は、元禄5年(1692)に前橋藩主酒井忠挙が前橋城三ノ丸に藩校として開設したのが始まりで、先代藩主忠清の失脚で傾いた家運を、学問を奨励して復興させる目的があったとされる。同時に、庶民が「手跡算教」を学べる学問所も開いた。好古堂では当初、400人程が出席していたが、役目のある家臣は次第に出席しなくなり、出席するのも藩主の在国中だけになるなど怠惰になっていった。

酒井家の姫路転封に伴い、好古堂も移り中曲輪に設けられた。それに対し、大胡城下にあった同じく藩校の求知堂は姫路には移されなかった。好古堂は当初、内京口門内(賢明女学院)に予定されたが(図11)、入封当初は惣社門内(イーグレひめじ)に設けられた(図12)。その後、文化年間に桜門南側に移り、天保13年(1842)には大手下馬前西側に移った。このとき、河合寸翁の仁寿山校から寄宿舎を移設し、演武場を増設するなど、好古堂の拡張が図られた。好古堂では、蔵書を勉強のため自宅に持ち帰ることができなかったり、子供(8歳から読書可)の間での弱い者いじめを禁じたり、出席率の良い者には師をとおして筆や紙が支給されるなど、細かい取り決めもあった(『姫陽秘鑑』文学)。

幕末の一時期、勝手不如意から休校期間があったようだが、「人材長育之道」は「御一国之政体」にも関わること(『姫陽秘鑑』文学)だとして、再び開校した。

(上:図11 下:図12)



出典、資料名など

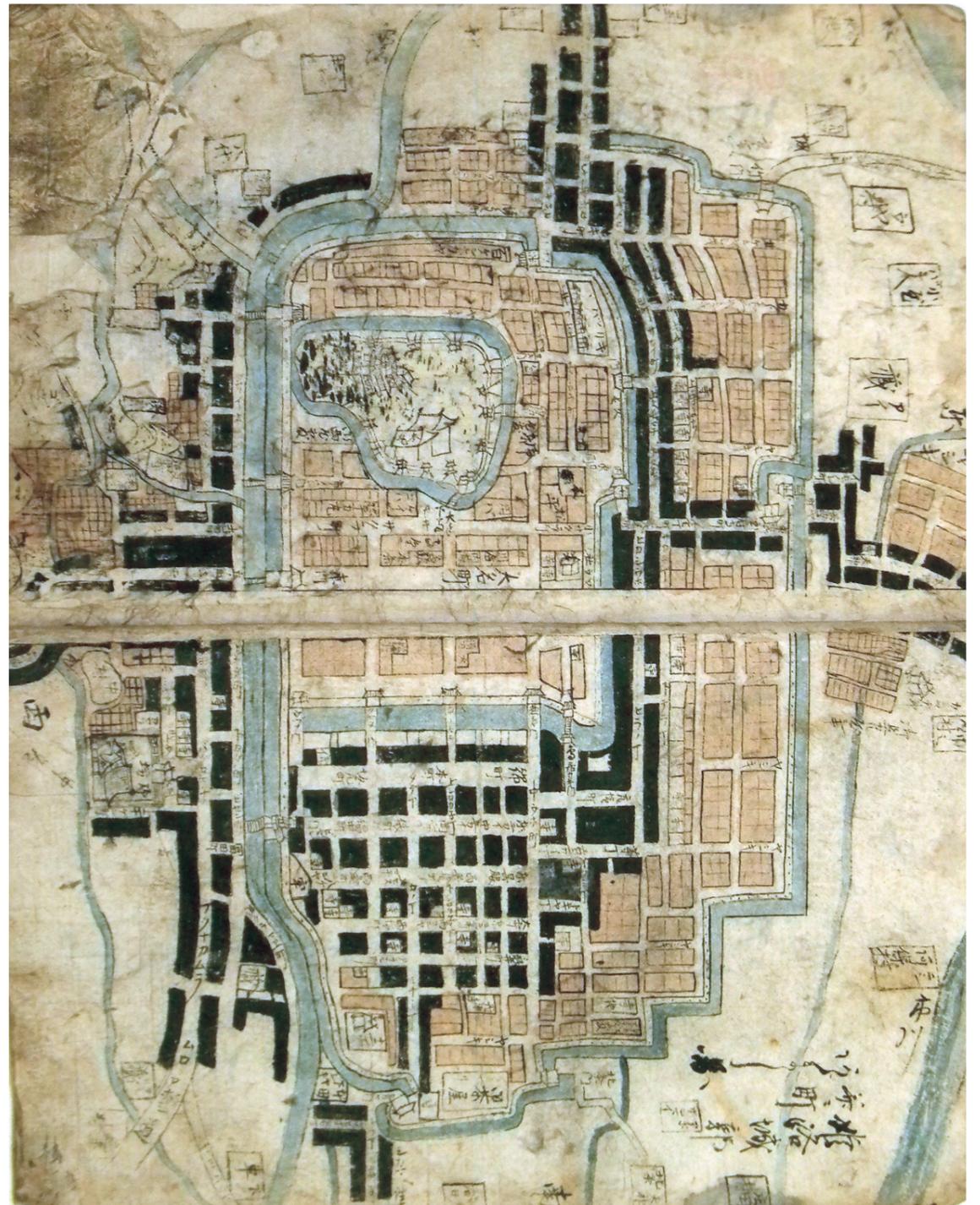
図1、7:『姫路侍屋敷新絵図』 図2、12:『姫路侍屋敷図』 図3、9:『姫路城図屏風』(大谷恵一氏所蔵、兵庫県立歴史博物館寄託) 表紙、図4、8:『大工幾蔵図冊』(姫路市立城内図書館蔵) 図5:姫路城ガイドツール企画委員会『世界文化遺産姫路城公式ガイドツール整備調査研究事業報告書(2)』2017より転載 図6:姫路市理蔵文化財センター『姫路城下町跡-姫路城跡第334次発掘調査報告書』2016より転載 図10:『高須隼人屋敷絵図』(姫路市立城内図書館史料整理室蔵) 図11:『白鷺旧図』(城郭研究室『姫路城絵図展』1998より転載)

姫路市立城郭研究室

〒670-0012 兵庫県姫路市本町68-258 日本城郭研究センター内
TEL (079)289-4877 / FAX (079)289-4890
URL <https://www.city.himeji.lg.jp/jyokakuen/>

令和8年(2026年)2月14日発行

姫路城下町を巡る(城南)



「姫路城郭并二町あらし図」(19世紀中頃、『大工幾蔵図冊』所収)

姫路市立城郭研究室

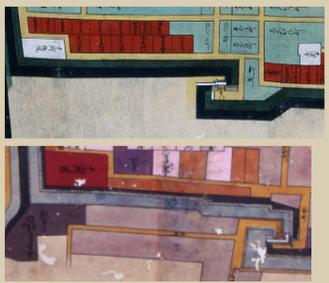
① キャッスルビュー

JR姫路駅高架整備に伴い、観光ビュースポットとして整備された。姫路駅から城へ行く人が、まず最初に通過する場所なので、江戸時代に姫路城下への南の入口であった飾万津門をイメージした建物とした。また、駅ビル前のサンクンガーデンも、外堀をモチーフにしている。

② 忍(しのび)町

(上: 図1 下: 図2)

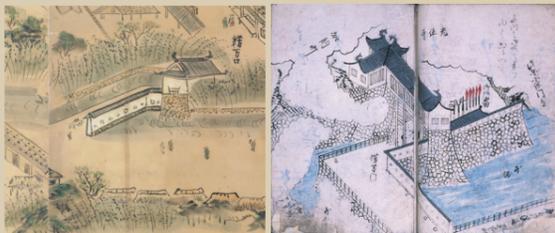
飾磨街道敷設に伴い、南畝村の一部が町場となった。延宝5年(1677)、この地を侍屋敷に取り立てるにあたり、薬師寺を栗山村に移したとされる(現三和寺)。その際、当地に忍びを配置したと伝わる。これが忍術を体得した“忍者”なのかは不明だが、酒井忠恭が大坂城代の時に、榊原政岑の行状を探る目的で姫路城下に家臣を潜入させているので、諜報活動に関わる者はいたことになる。



③ 飾万津門跡

(左: 図3 右: 図4)

姫路城とその外港である飾万津とを結ぶために飾磨街道が敷設された。その街道の城下の出入口に築かれた城門である。右図は左が北になるので、城外へ出るには天守に向かって行くことになる(北条門も同様)。また、土橋の北側には土塀を設けず、柵となっている。



④ 長壁神社・長源寺

池田輝政のとき、刑部大神を惣社境内から姫路城内に遷座した。宝永元年(1704)、榊原政邦は堅町の長源寺を刑部社の日供所(につくしよ)にしたとされる。昭和11年(1936)の『姫路市土地宝典』では、現在の長源寺と長壁神社の境内が入れ替わっている。戦災の影響があったのだろうか。

図6 「森重」銘の鉄釉瓶

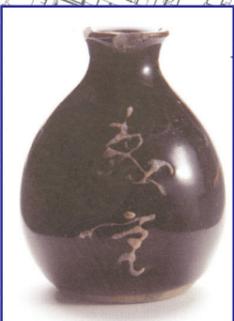


図5 那波家復元CG



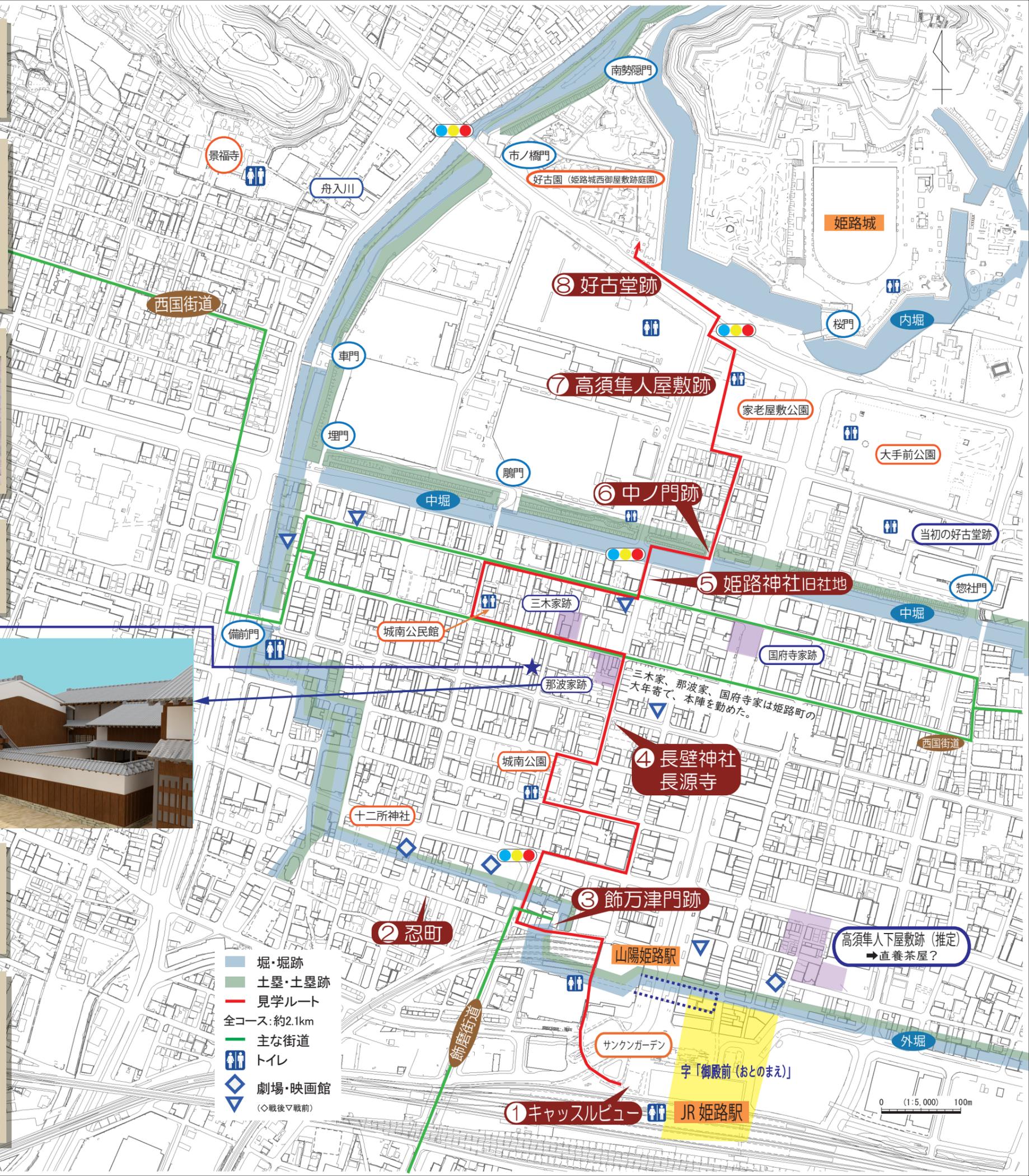
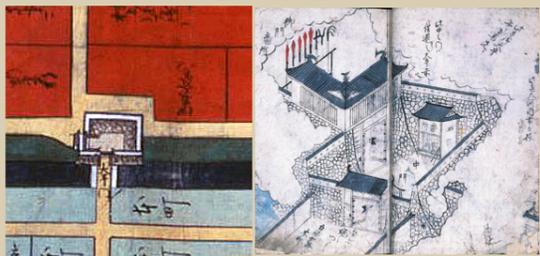
⑤ 姫路神社旧社地

明治12年(1879)、南部中堀沿いにあった年行事所(国府寺家とする説もあり)の跡地に藩祖酒井忠親を祀る神社として建立された。その北側には大正2年(1913)、姫路市立実科女学校(女子技芸学校→市立高等女学校、現琴丘高校)が開設された。神社は、昭和2年(1927)に姫山公園の喜斎門内に移転し、現在にいたる。

⑥ 中ノ門跡

(左: 図7 右: 図8)

姫路城下の外曲輪から中曲輪へ入るための城門のうち、正門にあたる。第一次榊原時代の絵図では「大手門」となっている(図7)。初入国の藩主は、国府寺家で一旦休憩してから、中ノ門から内曲輪へ向かう。門内には家老クラスの屋敷地があり、酒井時代では西側に河(川)合家、東側に大河内家の屋敷があった。



- 堀・堀跡
- 土塁・土塁跡
- 見学ルート
- 全コース: 約2.1km
- 主な街道
- トイレ
- 劇場・映画館
- (◇戦後▽戦前)

三木家、那波家、国府寺家は姫路町の大年寄で、本陣を勤めた。

高須隼人屋敷跡(推定)
→直養茶屋?